

〔讚岐典侍日記〕つとめておきてみれば、雪いみじく降たり、今もうちちる御まへを見れば、べちにたがひたる事なき心ちして、おはしますらん有様、ことく、に思ひなされていたる程に、ふれふれこゆきと、いはけなき御けはひにて仰せらる、聞ゆる、時〇鳥羽帝、こはたぞ、たが子にかと思ふほどに、誠にさぞかし、思ふに淺ましく、是をしよう、うちたのみ參らせてさぶらはんするか、たのもしげなきぞ哀なる、

〔徒然草〕ふれく、こゆき、たんばのこゆきといふ事、よねつきふるひたるに似たれば、粉雪といふ、たまれこゆきといふべきを、あやまりてたんばのとはいふなり、かきや木のまたにと、うたふべしと、ある物えり申き、昔よりいひける事にや、鳥羽院おさなくおはしまして、雪のふるにかく仰られけるよし、讚岐のすけが日記に書たり、

〔百練抄後鳥羽〕文治三年正月一日癸卯、自夜雪降、當新春之初呈豐年之瑞乎、

〔吾妻鏡脫漏〕嘉祿二年正月十八日甲戌、晚頭雪降、終夜不休、十九日乙亥、自昨日及今朝雪降積事、二尺餘、近年無比類云云、

〔百練抄後嵯峨〕寛元元年十一月五日丁未、今朝深雪盈尺、豐年呈瑞、去承元五年以後無如此之雪云云、

〔辨内侍日記〕十一月〇寛元四年十四日の夜、雪いと面白く、みちたえて積りにけり、〇中人々清涼殿へ立出てみれば、竹にさえたる風の音までも、身にまみて面白きに、月は猶雪げに曇りたりしも、中見所あり、

〔徒然草〕雪のおもしろうふりたりし朝人のが、りいふべき事有て文をやるとて、雪の事何ともいはざりし返事に、此雪いか、見ると、一筆のたまはせぬほどの、ひがく、しからん人の仰らるる事聞いるべきかは、返々くちおしき御心なりといひたりしこそ、をかしかりしか、いまはなき